平成24年度文学研究科修士論文要旨

スリランカ仏教に於けるサンガ

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究（Ⅰ）専修　榊　原　圭　人

北インドで釈迦という一人の人物により始まった仏教は，布教を通じてインド内外に広まった。現在まで信仰され続けている仏教は南北のルートを経由して伝播したものである。つまり，スリランカを経由し東南アジア世界に広まった南伝の上座部仏教と，東アジア系，チベット系の二つの北伝の大乗仏教である。スリランカは5世紀頃〜11世紀頃に掛け衰退した仏教発祥の地，インドと非常に類似したカースト的側面の強い王権制度の土壌を持つ郷土性をもち，地理的条件によるインドからの文化の流入を受けながら，栄枯盛衰を繰り返して正統派上座部仏教の国としてその名を今日にも響かせている。しかし，今日の様な形で教義が保持・継承されたのは12世紀のサンガ統一以降で，以後スリランカ仏教はマハーヴィハーラ派一色であった。この派がその創始以来保守的で有った事は通説だが，その保守性ゆえに他派の介入を許容しなかった。上座仏教が「仏の言葉継承正統」を主張する所以はここにあるとされている。

上座部仏教文化圏では教義と実践，出家と在家の区別が明確であり，出家した僧侶は人々の苦悩を説明し救済へと導く教義を説き，修行を積んで仏教の根本主張である「苦」の状態からの離脱である「涅槃」を目指す。一般の在家の人々は輪廻転生を繰り返す中で僧侶の社会であるサンガに帰依して功徳を積みより良い再生を目標としている。

スリランカ上座部仏教は，カースト文化の土壌に，王権により招来されたため，一般民衆の情報に対する秘匿性が極端に高く，達人宗教としての性質が明確に体系化して広がった。もとより原始仏教の口伝による文化伝承は「サンガ」という大伝統の形態を形成し，口伝伝承を「実践」という形でその文化（三宝）を護持してきた。

スリランカ島にインド本土より仏教サンガが伝来したのは，紀元前3世紀のアショーカ王の時代である。スリランカ王朝と仏教の歴史書であるパーリ語の『大王統史(Mahāvaṃsa)』によれば，アショーカ王と同時代のスリランカの国王，デーヴァーナン＝ピヤティッサの時代にアショーカ王の王子と伝説されるマヒンダ長老が四名の長老と沙弥・優婆塞各一名ずつを伴ってスリランカ島に来航して受戒を行ったとある。長老の数がマヒンダを含めて五名であった事は大きな意味を持つもので，マヒンダ一行，五名の長老比丘の来島は其処に受戒可能なサンガが成立した事を意味するものである。そしてこのインド人のサンガは，実際に多くのスリランカ人を出家得度させ，この国の教団の礎を築いた事を歴史書は伝えている。

この様にしてインドの上座部仏教のサンガが海を渡りスリランカに初めて伝わった訳だが，その際インド側に於いては時のアショーカ王のインド内外への仏教伝道師派遣政策の一環としてスリランカへのサンガ派遣があり，また彼等を受け入れたのはスリランカ王権であったという歴史はスリランカ仏教史に於いて非常に重要なポイントである。

スリランカでは教団内の分派もさることながら，紀元前1世紀経典の書写が実施されると，書写により目に見える「形」となったことで集団的組織形態から，個人レベルでの信仰の実践が可能となる。一個人での情報の総括と解釈，再発信は発・受信者のバイアスが掛かるという大前提のもと，その分野に於ける個体の知識差を埋めるために広義的な意味で捉えられる言葉に変換した後，発信されるものである。度重なる他国による侵略や，異文化の流入による特定のコミュニティ内部でしか通用しない文化が他文化圏との方向性の一致という要素をのりしろに混交・体系化・分裂と言った変質の体を見せながら広がっている。

そして，初伝よりその系譜は何とか維持し続け得たものの，仏教サンガの栄枯盛衰を繰り返すスリランカに於いて，サンガの維持存続のためには，その時々の世俗界の支配者としての権力者の支持や協力も不可欠な絶対条件であった。サンガ集団の教団存続のための戒統継承に対する強い志は，政治権力の意思と実行力の両方が相まって，時に利用し，利用されながら，教団存続を可能にしてきた。様々な文化が錯綜し，時にその統合を果たすが，場合により差異の表象として分裂の契機を創りだしており，その動態は複雑多岐である。

天台性具思想の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究(Ⅱ)専修　森　川　雄　基

この論文は，天台教学における「性具」思想に焦点を当てて論じたものである。この思想は，多くの先学の教学の解釈法や，研究論文があり，私も天台教学における思想を究明しようとして挑戦してみたものである。

初めに天台大師智顗（以下智顗）の生涯と著作について概説し，智顗がどのような師に会い，そして，どのようにして天台教学を体系化していったかを考察し，そこから性具思想の背景になったものは何かを考察した。

次に，天台教学の禅・止観について説かれている『釈禅波羅蜜次第法門』（以下『次第禅門』）・『修習止観坐禅法要』（以下『天台小止観』）・『摩訶止観』という三つの著作から，天台教学における禅・止観の在り方や，そこから展開されていく一念・陰入界・魔などの思想について考察した。

『次第禅門』は，智顗の三十代の若い頃の著作で，『大智度論』などを引用して，陰入界などを対治するための手段として坐禅の実践を重んじることを説いた著作である。ここでは特に，巻二から巻四を中心として考察の対象とし，止についての解釈法や，陰入界，魔に対する問題を主にして論じた。

『天台小止観』は，『次第禅門』の後に述べられた一巻の著作であるが，『次第禅門』で述べられた内容を受け継ぎ，簡潔にまとめられた書物である。ここでは特に，全十項目の内の正修行第六から証果第十までを考察の対象とし，『次第禅門』に述べられている思想との違いなどについて論じた。

『摩訶止観』は，「天台三大部」の観門について述べられている，三諦円融・十境・十重観法などが説かれた著作である。ここでは特に，『摩訶止観』巻五上に述べられている思想を中心とし，必要において『法華玄義』などの引用も参考資料の対象とした。『摩訶止観』では，十境・十乗観法が確立され，陰入界境や観不思議境などの思想が述べられている。この論文では，特にこの二つについて論じ，『次第禅門』や『天台小止観』に述べられている思想の違いについて論じた。

以上から智顗の思想には，三十代から五十代に至る間に徐々に変化が見られるが，それらは，これら三つの著作に述べられている天台教学の思想的変化によるものである。

次に，性具思想が述べられている『観音玄義』の作者についても，佐藤哲英氏の潅頂説と，安藤俊雄氏の智顗説の二つの説があることをはじめに述べ，その理由は何であるかを概説した。私は安藤俊雄氏の説を参考とし，智顗によって考えられた法華思想の延長であると考え，それをもとに考察していくことにした。

一念三千の思想については，『法華経』や『大智度論』などを典拠として作り上げられる世界観が，天台教学において形成された独自の世界観のことで，一念という一瞬の内に，善や悪のあらゆるものがそなわっているとされる思想である。『摩訶止観』や『法華玄義』の出典を参考にし，出来る限り詳細にそのことを明らかにした。それは，智顗が唱えた世界観こそ法華思想の完成であり，「天台三大部」における中心たる思想であると考えられるからである。そして，そこから展開されていく思想が，性具思想へと繋がっていくのである。

最後に『観音玄義』から，天台教学における仏陀観を考察し，そこから展開されていった性具思想について論じた。

以上，智顗が講述した文献をもとに性具思想を解明したが，天台教学における仏陀観は他の教学の仏陀観とは異なり，如来は性としては悪を本具しているが，修としては悪を具えているわけではない，というもので，そのことを究明したのがこの論文である。

中国禅宗史の研究

――唐代の禅僧たちを中心にして――

文学研究科宗教学仏教学専攻　禅学禅思想史研究(Ⅱ)専修　杉　原　修　一

中国に仏教が伝播した時期は明確でないが，紀元前後頃と言われている。この頃は主に，皇室や王族などの貴族社会のごく一部の人々に弘まっていた。時代が進み，南北朝時代になると一人のインド僧が渡来する。

それが菩提達摩である。中国の禅はその達摩から始まったとされる。その後，二祖慧可と三祖僧璨へと法は伝承されるが，当初から中国社会に大きく弘まったわけではない。

禅が中国で一大勢力となり，人々に知られるようになったのは唐代からである。その基盤を築いたのが「東山法門」と称される四祖大医道信と五祖大満弘忍の師資からなる教団である。古代インドで行われていた修行体系は，雨安居以外は遊行生活を送っていた。しかし，東山法門の修行形態は，多くの修行僧が一ヶ所に留まって集団で起居を共にするものであった。

これによって宗勢は飛躍的に拡大し，優れた禅僧が数多く育成された。多くの修行僧が集まったことで，自給自足の修行体制を採ることになり，作務・農作業にも修行としての意義が与えられた。東山法門の修行形態が，以後の「叢林生活」の基盤となったことで，禅の歴史にその名を残した。当時皇帝であった則天武后も，「もし，修行のことを論ずるならば，東山法門に勝るものはない」と賞讃したほどで，当時の禅宗に東山法門が与えた影響の大きさを窺うことができる。

五祖弘忍門下からは玉泉神秀の北宗禅と六祖大鑑慧能の南宗禅の法系が現れた。

両者は南能北秀・南頓北漸と言われ，その違いが強調されるが，実際には南北両宗の対立は，開元年間（七三二年頃）に滑台大雲寺（河南省）の無遮会で，神会が北宗系の嵩遠と法論を行い，神秀の系統を傍系と攻撃したことに始まる。その記録が『菩提達摩南宗定是非論』である。

慧能は幼少の頃から薪を売って家計を維持しており，客の一人『金剛般若経』を誦しているのを耳にする。その客から東山法門の存在を知り，出家することを決意した。後に慧能は弘忍より衣鉢を受けて，一六年ほど広州付近に隠棲していたが，「風幡問答」により法性寺の印宗（六二七〜七一三）に見出されて剃髪し，初めて禅の法門を説くことになった。活動の中心は韶州曲江の曹渓山宝林寺（後の南華寺）であり，晩年には故郷の新州に国恩寺を開いて生涯を終えている。

釈尊の教説を記した経典ではないにも関わらず「壇経」と称されるのは，南宗禅の人々にとっては，如来の教説と同じほどの重みを持っていたからであろう。

慧能は南宗禅に於いて第六祖に位置づけられるが，その背景には荷沢神会がいる。神会の活動は，師である慧能こそが正統な「六祖」であるという主張であった。

神秀は三帝の師と尊称されたように皇室をはじめとする支配階級に支持された。神会も北宗批判を行う上で支配階級を利用していたため，そういった人々に支持されていったのである。

しかし，七五五年に起こった安史の乱によって状況は一変する。騒乱によって上層階級が没落し，上層階級に支持されていた神会の荷沢宗は衰退を余儀なくされたのである。神秀の北宗禅も，もともと神会の北宗批判によって打撃を受けており，安史の乱によって荷沢宗と共に衰退していったのである。

北宗禅と荷沢宗が衰退したことで慧能門下の勢力が拡大していった。その中心となったのが青原行思と南嶽懐譲である。二人は共に慧能の弟子として，二大甘露門と称された。

二人の禅風は，東山法門で確立した叢林の修行体系を飛躍的に発展させたと言ってよい。行思の「廬陵の米」や懐譲の「磨磚作鏡」といった問答で見られるように，日常生活の中で悟りの境地を求めることが一般化していったのである。

この二人の弟子に石頭希遷と馬祖道一が現れたことで，唐代の禅はさらに盛んになっていった。希遷は純粋な禅として「真金鋪」と言われ，道一の禅は多くの弟子を獲得したが，各々個性ある禅風だったことから「雑貨鋪」と呼ばれた。この頃の禅僧の活動した場所は，主に洪州や南嶽の南方を中心とした地域であり，それぞれ特徴のある禅風を挙揚したと言える。そのことが後の時代で形成される各宗派にまで至るのである。

唐代の禅が隆盛を迎えることが出来たのは，東山法門の禅があったからこそである。叢林の修行により，日常生活から悟りを開くという新しい禅の思想は，数多くの祖師らの活動と活躍によって発展し，今日の禅に影響しているのである。

こうした祖師の記録である「灯史」と称される禅僧の伝記が編纂された。『続高僧伝』『祖堂集』『景徳伝灯録』などはその代表である。拙論は灯史を基本資料としてこの時代の禅を論じた。

王朝日記の新研究

―― 藤原兼実『玉葉』を中心に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究（Ⅰ）専修　児　玉　亜矢子

平安時代中期に発生した王朝日記は，毎日の事実のみを記すだけでなく，時にそれらについての感想も記されており，その際，様々な表現の語を用いることになる。疑問を表わす語句は，古記録で頻出しており，例えば文末によく付く「歟」や「何」が付いている語は単純に疑問を表わしていると言っていいだろう。疑問は日記中での記主の考えや感情を読み解くのにわかりやすい語である。本稿では，『玉葉』中の疑問表現である「如何」「不審」を中心に検証した。

兼実が『玉葉』中で「如何」「不審」と記した回数を年代でみていくと，①承安２（1172）年，②安元２（1176）年頃，③治承５（1180）年頃，④文治２（1186）年頃，⑤建久２（1191）年の５つの時期の日記に増加傾向がみられる。これらは，ほぼこの時代に起こった事件・出来事と関連している。②は皇后藤原育子や六条上皇の死去が重なり，鹿ケ谷事件が起きた頃である。③は福原遷都や清盛の死去・頼朝の挙兵など世間を騒がせた年である。④は平氏の滅亡と兼実が摂政就任を果たした年である。⑤は兼実が関白就任の年であり，前年には兼実の娘の任子が後鳥羽天皇の中宮となっている。これらから，兼実は世間を騒がせた出来事や政治変局の時に疑問表現が増加している事がわかる。

兼実の日記の記事が安定してきたＡ仁安３（1168）年と兼実が政治的に恵まれていたＢ建久５（1194）年の「如何」を例にとってみてみる。Ａの時，兼実は20歳で右大臣であった。この年の兼実が発した「如何」の回数は25回で，内容としては，節会に関してが10回でそれ以外もほぼ朝廷行事における公事に関してである。主として儀式作法についてが兼実の疑問の対象であったとわかる。次にＢは，兼実は46歳で関白であった。この年の回数は16回で，内容は叙位や除目の作法の事がほとんどを占めている。疑問対象が朝廷の公事なのは変わっていないが，関白となった事で，儀式での立場がより総覧する者としての立場へと変わっている。さらに疑問を向けている事が作法の次第等への疑問から，特に儀式を共に行う執筆の作法などへの疑問に変わっている。これは，Ｂの時に執筆を行っていた左大臣実房の作法が，兼実とは違う作法（中御門経宗の作法）を手本としていたからという理由がみえてくる。

次に「不審」だが，全体を通してみると公事関連が76％，政治関連が８％，その他が16％となっており，これらから，兼実の疑問対象はほぼ公事関連である事がわかる。先に述べた疑問表現の増加時期と内容を検証してみると，①は兼実が神宮上卿になった年で，世間を賑わす事件ではないが，兼実にとっては重要な出来事であった。神宮上卿は伊勢神宮の裁許等の伊勢神宮に関する事を担当した上卿の事である。この時，先祖で神宮上卿に就いた者がおらず，摂関家の先例がわからなかった為，兼実は摂関家出身で就いた事のある藤原頼長の先例を尋ねる為にその子の師長に尋ね，他に神宮弁兼光や明法博士等に作法や忌事などを尋ねている。その為，この時期の疑問表現が増加している。②は鹿ケ谷事件の頃であるが，それとは関係のない公事についての疑問表現である。③から④になるまでは，治承４（1180）年から元暦２（1185）年に政治関連が増加している。これは安徳天皇の即位による平氏絶頂期から平氏滅亡までの期間にあたっている。この間に兼実が政治的疑問を増加させたのは，兼実の疑問が世相と重なっている事を示していると考えられる。④の時期は兼実が摂政になった関連や天皇の代替わりによる斎宮の事等が疑問の内容として多くみられる。⑤の時期は娘の中宮任子に関する事が多いように思われる。内容をみていくと増加時期であっても，基本的に兼実の疑問は公事関連に向けられている。

兼実は行事進行中の公事だけでなく，これから行う公事についても疑問に思っているのが，若年の頃における兄基房との公事語りや官務家の小槻隆職への問合せでわかる。特にこれは兼実が上卿として儀式に臨む際に多くみられる。

儀式以外での兼実の疑問は，清盛の福原遷都での政情の不安や中宮任子・後鳥羽天皇の病の事など，兼実が不安な事についての疑問がみられる。

兼実が日記に記した疑問表現は，兼実が公事に熱心であった為，公事に関する事が多くなっている。疑問表現を通じてみた兼実は，摂関家としての作法を大事にしており，作法に不安がある儀式を行う時には事前に先例を調べたり，人に尋ねたりと，とても勤勉であるとともに，摂関家の作法以外を厳しく批判する神経質な人物であると感じられた。

王朝貴族の辞官について

文学研究科歴史学専攻　日本史研究（Ⅰ）専修　丹　羽　あゆみ

朝廷に仕える官人たちは，どのようにして自らの官職を辞するのであろうか。任官については，除目など朝廷の重要な年中行事として貴族の日記に数多く登場し，その研究も非常に多いのに対し，辞官に関しては研究も少なく，あまり関心を向けられてこなかったように思われる。五位以上の官人の辞職は「上表」という制度をもっておこなわれ，貴族の日記にもその記事が多く登場する。「表」とは，皇族や臣下から天皇・太上天皇に奉る文書の一形式で，慶事に対して奉る賀表や，官を致仕するにあたっての辞表，僧綱辞官の表，皇太子・親王が封戸を辞す表などが存在した。本論は特に官職を辞する際の上表の問題を取り上げ，貴族社会において官職を辞することの意味を検討したものである。時期的には六国史段階から『小右記』の下限である長元5（1032）年までを対象にした。

第一に，当該期における「致仕」した官人の事例を収集し，上表の有無やその年齢などを調査し，大きな傾向を把握し，さらに上表の具体的な史料が豊富な摂関・大臣に焦点を当て，その理由を検討した。

結果，淳和天皇以前では令制の規定のように七十歳という年齢を基準にした致仕を求める上表がほとんどであり，大半は天皇から許されていた。しかし，仁明天皇期に入ると，上表の件数が急増するとともに，その理由についても，病や出家のため真に辞官を求めているものと，辞官を前提としない上表とが現れ始める。後者では，特に大臣など上級官職において任官後に上表という手続きを経る中で天皇との君臣関係の確認作業をおこなうという性質が付属するようになったと考えられる。その傾向は，右大臣に特徴的に現れ，この職の平安中期における特殊性を見出すことができた。

次に抽出された君臣関係の確認という性質を当時の貴族の日記に多く見える儀式の記事からさらに検討を加えた。十世紀段階の『貞信公記』，『九暦』には，それほど多くの儀式作法は記述されていないが，上表をおこなった後の，天皇からの勅答や返表に関しての記事がすでに多くみられ，天皇からの回答を重視していたことがうかがえる。さらに十一世紀に入ると，勅答や返表を受ける際の作法について詳細に記述されるようになり，貴族たちの関心が天皇からの回答に集中していったことが知られた。このように，天皇から返答を得るという行為は，辞官とは逆に天皇から自らが当該の官職に就くことを認められているという認識であったと思われる。

この確認行為で重要なのは，上表の際，朝廷に派遣する使者（上表使）と天皇からの回答を伝える使者（勅答使）の問題である。前者については，上表者の身内，身分としては近衛次将，五位蔵人などが用いられ，後者については，ほとんどの場合，地下ではない近衛次将が遣わされたことが判明した。

十世紀の頃から上表の使者として近衛の次将が重視されていく背景には，近衛府の上級官人が軍事的性格を失い，上級貴族の子弟の昇進ルート化されていく時期とほぼ重なっていることから，天皇の信任を得た確認として，自分たちの子弟が在籍し，天皇に近侍する近衛の次将が必要であったことが知られる。

近衛の次将を通して天皇の回答を得る儀式を行うということは，天皇と自らの君臣関係の構築・再確認のために極めて重要な役割を果たしていたのではないだろうか。

戦国大名武田氏の領国支配と宗教政策

文学研究科歴史学専攻　日本史研究（Ⅱ）専修　島　倉　希　恵

本論文では，武田氏による甲斐・信濃両国での宗教政策について，武田領国の地域的特質を考えながら検討した。戦国期は戦乱などにより寺院は焼失したり，寺領の押妨の被害にあったりしていた。武田信玄は特に信仰深かったが，信玄らの戦国大名は衰亡した寺院の再興や保護を領国支配の一環として行い，このことと関連して各宗派の本山系寺院との外交交渉も行った。それを取り扱ったのが第一章である。第一節では天台宗，第二節では真言宗，第三節では鎌倉新仏教である臨済宗・浄土真宗・曹洞宗について考察した。天台・真言・臨済・浄土真宗との交渉はそれぞれの本山が京都にあったことから，朝廷や室町幕府との情報交換や世情などを探るために重要だった。一方，曹洞宗のみ本山が京都になかったため朝廷・幕府との外交よりも大名や国人の支持をうけて地方寺院が拡大していたことから，他の大名・国人との外交交渉を行う為に活用された。本章では，上記の視点からそれぞれの宗派が武田氏とどのような関係を築いていったかを考察した。

第二章では，前章で取り扱った各宗派に加え，甲斐国における曹洞宗・臨済宗といった禅宗の発展について考察した。信玄は，領国支配拡充の過程で旧・新仏教を問わず保護し，民政の中心的役割を果たしたと一般的にいわれている。しかし，甲斐国内では，宗派の発展を具体的に示す寺院の創建についてみると，圧倒的に禅宗系寺院が多くなる。甲斐国は国中と郡内の二地域に分けられるが，山梨郡・八代郡・巨摩郡の国中地域は，甲府盆地を中心に高山峻嶺が囲繞し，河川は全て笛吹・釜無両川に集まって富士川に統合されて南流するように，きわめて統一的な地形となっている。一方，郡内地域は都留郡からなり，全般が山間部に位置していて個有の特別な地域を形成していた。これに対し，山梨・八代郡は平坦部が多く，郡内地域の都留郡に比べると生産力が高く，国中地域は甲斐国の存立を規定する地域であった。武田氏はその領国支配において，笛吹・釜無両川沿いを直接の勢力範囲とし，盆地周辺の山間部は土着性の強い辺境武士団が自身の地域支配を行っていた。武田氏とその領国は，上記のような地形的条件にも規制されて軍事・民政を行っていた。こうしたなかで，臨済宗・曹洞宗は，武田領国支配の全盛期以前に土豪の外護をうけてすでに教線を拡張し，やがて武田氏の保護を得てほぼ甲斐全域に渡って拡張していった過程を考察した。

第三章では甲州市塩山にある臨済宗向嶽寺派の大本山向岳寺について考察した。第一節では臨済宗を甲斐国に広めた一人者である抜隊得勝の活動を検討し，第二節では向岳寺の寺領の拡大過程，第三節では武田氏による向岳寺の寺領保護についてみた。抜隊得勝は嘉暦２（1327）年に相模国足柄郡中村郷で生まれ，諸国の禅僧を歴訪し，甲斐国塩山へと入り，牧荘宝珠寺の昌秀の仲介で領主の武田信成の外護を受けて向岳寺を開いた。向岳寺の寺領拡大過程は三段階に分けられ，第１期は甲斐国内での武田氏権力が形成される前の時期，第２期は武田氏の権力が甲斐国で浸透した頃で，武田氏の家臣らからの寄進により向岳寺の寺領はこの頃に拡大していったこと，第３期にあたる永禄12（1569）年～天正11（1583）年の時期は新たに寄進や買得によって得た寺領はなく，在地の寺領の住民などからの押妨を受けていたことを指摘した。第三節では近接する地頭との接触を余儀なくさせられた向岳寺が地頭らによる押妨から免れるために大名権力武田氏に依存していった過程を述べた。

第四章では，信濃国内の曹洞宗のありかたを考察した。第一節では，信濃国内での曹洞宗の発展を検討した。曹洞宗の展開は15～16世紀の間に集中し，在地に割拠する有力国人や在地領主にうけ入れられたことを述べた。第二節では，武田氏の信濃侵攻後の対曹洞宗寺院政策を検討した。ここで重視したのが，僧侶の登録・住持の任免などの人事を統括した「僧録」と呼ばれる役職である。信玄は龍雲寺（佐久市）の北高全祝を僧録に定め，龍雲寺を中心にして信濃への権力浸透をはかっていったことを考察した。また，信玄の子勝頼の時代に，神奈川県南足柄市にある最乗寺の輪住を勤めていた定津院と興因寺の争いを年代ごとに検討した。第三節では，龍雲寺の寺領の変遷を確認し，さらに勝頼が敗れたあとに甲斐・信濃両国の経営に関わった滝川一益や北条氏直の時期の寺領の内容と推移を検討した。

室町殿と武家伝奏

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅱ)専修　田　中　優　香

本論文では，室町期の伝奏の性格や役割，彼らの活動について考察した。特に，義満政権以前の伝奏の役割にふれながら，足利義満政権下のもとで室町殿へ伺候する伝奏らについて個別的に言及した。そして，公家の保持してきた国家機能の中に属し院・天皇＝太政官のもとで伝達を行う役目をおっていた伝奏が，室町殿の王権へ吸収されていった過程を具体的に見ながら，室町殿と武家伝奏の関係性を考察した。

第一章では，義満政権以前の治天の王権での伝奏の位置を考え，のちに室町殿の王権樹立にともない，伝奏の位置がどのように変化していったのか論じた。第一節では，義満政権以前の治天の王権を中心に考察した。伝奏・奉行が関与した文書の伝達ルートを確認し，治天（院）は天皇の意志を確認することなく天皇の命として太政官を動かすことができたことを確認した。また，室町殿の王権が，太政官のもとにあった伝奏の機能を吸収し，伝奏が公武両者に仕えていたことを述べた。第二節では，義満と武家伝奏の関係について，義満と治天（院）との関係を文書発給ルートから考察し，室町殿の王権確立以前と以後とを比較・検討して，院（治天）と室町殿をつなぐ伝達のしくみについて，王権確立後の伝奏が公武両属性を強めていき公武関係にとって重要な役職となっていった様相を述べた。第三節では，義満政権下での伝奏の具体的な活動について，寺社権門を伝奏万里小路嗣房の活動から，公家権門を日野重光の活動を例にあげて考察した。

第二章では，前章でみた義満政権以前と以後の伝奏の具体的な活動と役割について考察した。第一節では，足利政権下の武家伝奏の三人をとりあげて，義満政権下で伝奏が武家側への伝達を担当する任務にあった様子，また，南都・鴨社・石清水八幡宮・長講堂・山門伝奏の設置について考察し，公武間の伝達を行う役割を果たしていた様子を述べた。第二節では，伝奏の補任権の所在について南都伝奏を例にあげて考察し，伝奏の公武両属性について述べた。第三節では，室町殿と伝奏の関係性を踏まえ，伝奏広橋兼宣の奉書と後円融天皇親政下の綸旨を比較し，義満からの伝達と伝奏奉書の伝達のしくみについて考察した。

第三章では，義満政権下における伝奏として活躍した中流実務官僚の日野・広橋・万里小路家の役割と動向を考察した。第一節では，日野重光と万里小路嗣房の例をあげて，両伝奏の立場や特色を考えた。第二節ではさらにしぼって，義満・義教政権下での広橋・日野・万里小路家の活動について考察した。その結果，広橋仲光・日野重光・万里小路時房については，南都伝奏として室町殿の仰せを興福寺に伝達する役割を果たしたと読み取ることができた。また，時房は将軍義教の伝奏として政策決定の会議に参画することを許可されている点から，伝奏は寺社権門に対する影響力が大きかったと考えた。第三節では，南都伝奏の職務について，義満政権下の南都伝奏広橋仲光の事例から考察した。南都に関する伝奏奉書の事例としては，まず寺僧の権益や身分に関するものに，義満が一乗院の僧侶に対して伝奏広橋仲光を通して仰せを下したものがあり，寺領・境内に関するものには，義満が興福寺の寺領に対し伝奏仲光を通して仰せを下しているものがあった。また，大和国中は，当時，興福寺が実質的な守護として支配していた。義満はその統轄を行う一環として，南都伝奏を通して仰せを下していた。検断に関しては，寺領・境内の場合と同様に大和国支配の一環として，また雑務検断についても伝奏奉書を通して行っていた。こうした興福寺に対する幕府のやりとりは，義満・義教期には頻繁に行われていたようであり，義満政権においては興福寺とその寺僧の権益に関する認可・裁定の通達は，南都伝奏の職権であった。

以上，主に義満政権における伝奏の性格や役割について，その活動を中心に考察を行った。私は，今回，室町期の伝奏という役職に興味を抱き修士論文にまとめた。結論として，伝奏は幕府・朝廷間の伝達を行う性格を有しており，特に義満政権下では「武家」との関係が強化されていくなかで，公家権門・寺社権門に関して伝奏奉書を発給し，また幕府政治に関与し，室町殿＝義満の仰せを下していたことが分かった。義満政権下の伝奏は，公武関係を円滑に行う調停役であり，「武家」側としては伝奏奉書を発給するという活動を行い，「公家」側としては室町殿への橋渡しとなっている，そうした性格や役割をもっていたのである。

村上水軍をめぐる戦国期の軍事秩序

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅱ)専修　中　西　彩　奈

本論文では,中世瀬戸内で活躍した村上水軍について,その足取りを追うとともに,毛利・河野氏らの大名との関係について考察した。第一章では彼らの活動と大名からの認識について,第二・三章では来嶋氏・能島氏の活躍を中心に,第四章では海賊の終焉を海賊禁止令との関係から考察した。彼らの特徴としてあげられるのは,独自の権力を確立していたということである。直接の主君筋の河野氏に対し,彼らは裏切りと忠誠を重ねている。また,彼らに対し河野氏やその上の主君である毛利氏は頻繁に合戦に対する感状や,合戦参加をお願いする文書を送っている。ここに彼らの独自の権力,そして大名たちにとっての彼らの存在の重要性を見て取ることができるのである。

第一章は村上氏の概要を述べた。第一節では村上氏の出自,そして村上氏の名前が見える文書に触れ,彼らが大名にとってどういった存在だったかを,第二章以降で述べる前提として大まかにみておいた。村上氏の出自は曖昧で,そのことにふれた資料のほとんどが近世になってつくられていることが多く,内容にも誤差がある。そのため今回は出自に関してはそのように言われている程度にとどめておいた。本稿で用いた弓削島の文書は,村上氏の名前が見られる最初の文書とされており,ここから彼らの海城での役割を見て取ることができる。彼らは瀬戸内海という海流や渡航に困難がつきまとうこの海を牛耳ることで,その案内・警固によって経済基盤を築いていった。彼らのこの活動は大名も頼りにしていた部分があり,その後のいくつの文書でも目にすることができる。ここに彼らの水軍力,そして大名との持ちつ持たれつの関係を見て取ることができる。第二節では鹿島城について,その文書からこの島の水軍にとっての意義を考察し,海城の目的は瀬戸内海交通の監視のためであり,そのための整備が進められていたことを述べた。

第二章では村上氏が表立って活躍するきっかけとなった厳島合戦について,参戦説・非参戦説の双方を検証した。非参戦説の根拠となっている理由の一つは合戦に対する感状がないことである。さらに敵対関係をにおわせる文書の存在から非参戦説も考えられているが,厳島合戦は事後処理としての戦が続くため,その時期のものではないかと参戦説では述べられており,また,当時の社家の野坂房顕が合戦から25年の歳月をえたとはいえ記録に残しており,さらに実際に参加した二宮氏も覚書として残している。感状がないことは気になる点であるが,実際に参加した武将の記録に合戦の記載が残っている以上無視することはできない。よって私は参戦説に賛同している。第三節では厳島合戦後の村上氏の動向を述べた。村上氏は,すぐに毛利氏に忠誠を誓ったわけではなく,能島氏は一時敵対し,来島氏は織田氏に寝返っている。毛利・織田氏とのことについては,余談ではあるが,来島氏の逆心についての文書内に信長の死について触れたものがある。本能寺の変からわずか六日後のことである。この早さからみて,毛利氏側では信長の動きを探るため間者ないしは独自の情報交通網を保持していたのではないかと考えられる。

第三章では河野氏との関係を,特に能島氏にしぼって考察した。第一節では大まかな関係をみたうえで,必ずしも河野氏に従っていたわけではないことを述べた。第二節以降では年代をわけ,初めに永禄・元亀年間の毛利・大友両氏の合戦に際しての村上氏の動向をみてみた。この当時の能島村上氏は大友氏側についており,一時期は和解したものの再び大友氏側についていることから,能島氏と河野氏の主従関係の曖昧さがみてとれる。さらに元亀年間における能島氏の背面にある河野氏の立場を元に考察した。当時,能島氏だけでなく重臣平岡氏も大友氏と一脈を通じ合わせていたため,河野氏の立場は微妙なものであった。このことからも能島氏は河野氏に反する独自の立場をとっていたため,確固たる主従関係はなかったように思われるが,小早川隆景に対する河野通直への不遇について立腹している点から一概にそうとも言い切れず,河野氏・能島氏間の主従関係は基本的な主従関係はあるものの,それは情勢に左右される能島氏の利害の上で成り立っていたと言えるのではないだろうか。第三節では織田氏の働きかけに際しての能島氏の行動をみてみた。村上武吉と子元吉で,織田氏側に走ろうとしていたのは元吉のほうであり,武吉はそれを引きとめるためのパイプ役を担っていた節があることを指摘した。

第四章では海賊の終焉のきっかけである海賊禁止令を検討した。海賊禁止令は,これ自体が初令ではなく,再令として出されたものである。その初令とされているのが深堀氏処分の事例であり,その内容を一つずつ見ていき,初令と再令の目的の違い,そこから生まれる村上氏への影響とその意図を検討した。

近代日本における天皇・宮中の形成過程

――「侍補グループ」の動向を中心にして――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)専修　海老澤　英　典

本稿は，明治期に天皇の側近くで活躍した元田永孚や土方久元ら「侍補グループ」に着目し，彼らが近代日本の天皇制や宮中の形成にどのような影響をあたえたのかを解明しようとした。従来の「侍補グループ」を扱った研究は，「天皇親政」をめぐって伊藤博文ら内閣と対立した点に多く注目を集めてきたが，内閣と対立した「侍補グループ」がなぜ長期間にわたって天皇の側近くの職に就き続けることができたのかという点については充分には明らかにされてこなかった。そこで「侍補グループ」が内閣と対立したにもかかわらず，長期間にわたって政権の中枢に在職し続けることができたのかを明らかにし，彼らが政権の中枢に在職することの意義について考察した。なお，「侍補グループ」の検討をおこなう際，「土方久元日記」を軸に考察を進めた。

第1章では，侍補設置の経緯について考察した。西南戦争による政府の混乱を契機に設置された侍補は，太政大臣の三条実美や右大臣の岩倉具視，それに薩摩派の領袖であった大久保利通らの支持・後援を受けながら活動しており，このことは侍補の人選が三条らの意向によってなされたことからも明らかである。また，侍補らは在野の民権派からの藩閥政治批判を危惧し，それを防ぐために「天皇親政」を内閣に要請しており，侍補らが主張する「天皇親政」は，藩閥勢力の政治を円滑におこなうための方策であった。

第2章では，侍補が廃止された経緯について検討した。明治12年の宮中改革によって侍補は勅任官に位置づけられたが，同時に天皇との自由な会談に制限が設けられた。これに対して，侍補は「輔導」を充分に担うことができないとし，侍補を廃止して大臣・参議が「輔導」を担うか，または侍補の権限を強化するかという二者択一の案を内閣に提示したのである。これは侍補が「輔導」の任務を遂行することを第一義的に考え，行動が制限されることで「輔導」を充分に出来ない状態となるならば大臣・参議に職務を譲っても構わないと考えていたからであった。つまり，侍補と内閣の間には意見の相違は存在するものの決定的に対立していたのではなかったのであり，このことは侍補廃止が決定した際に，土方久元が日記に「甚安心」と記していることからも明らかである。

第3章では，明治14年の政変に「侍補グループ」がどのような行動をとったのかについて検討を加えた。「侍補グループ」は明治14年の政変においても重要な位置をしめており，官有物払下げに反対し，大隈重信の民権派への接近を批判，さらに薩長独占の政権運営への是正要求をおこない，協同歩調を取る勢力と中正党を結成していた。そこでは，侍補であった際に培っていた宮中での立場から有力な皇族や大臣などに多面的に工作をおこなっており，これは有力皇族の政変に対する行動に少なからず影響を及ぼしたのであった。

第4章では，内閣制度の創出によって「侍補グループ」の立場がどのように変化したのかを考察した。明治14年の政変後の「侍補グループ」は宮中の要務に迎えられていたこともあり，内閣制度創出などの改革後も天皇側近く仕えて宮中の事務や天皇からの相談を受ける重要な勢力であった。こうして，「侍補グループ」は内閣制度の創出という改革を経てもなお，宮中に影響力をもつ存在であり続けたのである。

第5章では，枢密顧問官として憲法制定の議論に参加した「侍補グループ」がどのような姿勢で臨んだのかを考察した。『枢密院会議議事録』を確認してみると，「侍補グループ」は枢密院会議において際立った発言をしておらず，天皇や宮中に関わる条文も基本的に原案に賛成している。これは憲法に対する意見の違いによって枢密院が空転することを恐れた伊藤博文が，枢密院での憲法に関する議論に先だって「侍補グループ」の意見を聞き，厳しい意見が枢密院で出ないように工作したからであった。つまり，伊藤ら政権を担う者にとって，天皇からの信頼や有力皇族との人脈をもつ「侍補グループ」は，充分な配慮を要する勢力であったのである。

以上の考察から，「侍補グループ」は天皇からの信頼や有力皇族との人脈を背景に政府の行動を抑制する存在であったが，決して反政府的な勢力ではなかったといえる。したがって，参議と侍補の対立構造として捉えられてきた従来の理解は適切ではなく，「侍補グループ」は参議らとの意見の相違はあるものの，決定的な対立はなかったと考えるべきであろう。だからこそ，長期間にわたって政権の中枢に在職することができ，皇族らの意見の取りまとめなどの重要な役割を担うことができたのである。

戦時期機業地帯における民衆の「生活」意識と地域変容

――「加藤幸三日記」を中心に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)専修　吉　田　成　孝

大正期から戦時期を対象とした民衆意識と地域社会については，社会運動史研究により，大正デモクラシーが戦争・ファシズムへ取って代わられる過程を明らかにされてきている。

しかし，先行研究の多くは社会運動を分析することから，運動を直接担い手となった人々の具体像は明らかにしてはいるものの，運動の担い手とはならなかった人々の存在を視野に入れた考察は十分ではなく，加えて1920年代に形成された政治・社会システムや民衆意識が1930・40年代にいかに継承されたのかという点についても十分に論じられていない。しかも研究のほとんどは農村社会を対象としており，農村以外の地域における1920年代から1930年代の分析が十分ではないと思われる。

以上のような研究状況を前提に，本研究では基本的に政治・社会運動によらず，労働・生産・教育・家族関係など生活問題から民衆意識について明らかにすることを課題とした。その際，1920年代と1930・40年代の差異と同時に，その連続性にも留意した。

中心史料とした「加藤幸三日記（以下，日記と称す）」は，中島郡起町で織物製造業を営んでいた加藤幸三によって大正初期から太平洋戦争後に至るまで記帳され続けた史料である。幸三は1900年の生まれで，1920年代に大正デモクラシーをを経験し，1930年代以降は町内の各役職も歴任している。「日記」には，彼の日常生活が機業経営から食事内容に至るまで極めて詳細に記録されており，「日記」を詳細に検討することから政治・社会運動によらない生活からみた民衆意識を窺うことができ，1920年代と1930年代の連続性という研究上の問題点を補完することができる貴重な史料である。

分析対象とした愛知県中島郡起町は，大正期以降，動力織機の導入による近代化と，染織整理技術の発展による毛織物の増産を背景に機業地帯として発展してきた地域で，起町の事例分析をつうじて農村以外の1920年代から1930年代の地域社会像の一端を明らかにすることができた。

第１章では，1910年代から20年代前半の，いわゆる大正デモクラシー下における加藤幸三の自己形成について考察した。大正デモクラシーの影響を受けた幸三は，自己の権利や人格の認知を主張し始め，工場労働者の賃金改要求や成普選要求など地域的な行動として具現化したが，そのような動きは彼らの生活改善には結びつかなかった。機業地帯として発展してきた起町において，また織物工場を経営していた加藤家にとって，生活の改善・向上のための最も基礎的な手法が機業経営の改良であった。

第２章では，満州事変勃発に伴う加藤幸三の対応について考察した。「日記」では，満州事変について，織物製品の輸出停止を招き，機業経営への悪影響を及ぼしかねない危機的状況として記されている。熱狂的な戦争支持として位置付けられてきた満州事変勃発時の民衆意識は，一面では機業経営，すなわち生活の改善を阻害する要因として捉えられていたのである。そして，これらの機業経営に対する危機感は，彼の生活およびその改善が機業経営と結びついていたことを示すものであった。

第３章では，日中戦争勃発以後のいわゆる戦時期における加藤幸三の生活防衛をめぐる動きについて考察した。とくに日中戦争後の織物産業は，統制の強化に伴う綿糸を中心とした原料の統制によって機業経営の改良を妨げるものであったから，幸三にとって戦争は，一面では批判の対象であった。幸三は戦争の影響により機業経営の悪化を懸念しており，戦争の早期終結を望んでいるばかりか，皇室という日本の体制の中枢への批判にも及んでいる。また，敗戦後の彼の所感は，体制的な問題よりも今後の織物業界の動向を不安視するものであった。

これらの考察から，機業地帯として発展を遂げてきた起町では，大正期には運動やサークル活動を通じた地域改良が指向されながらも，一貫して織物産業を基礎としながら地域ならびに生活の改良を図っていったことが「日記」から明らかとなった。

しかしながら，機業地帯の地域社会像を明らかにするためには「日記」の分析だけでは不十分であろう。地域内でどのような意識の相違が存在し，同意を形成していく過程を把握するためには，「日記」以外の史料の分析や他の機業地帯との比較検討が必要不可欠であろう。今後の研究課題としたい。

日中戦争期における華中南の交通網と物流

――粤漢鉄道と公路・水運を主として――

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究(Ⅱ)専修　大　野　絢　也

日中戦争の勃発時，粤漢鉄道は中国の華中・華南を結ぶ主要な陸上交通ルートであった。すなわち華中の長江中流における経済中心地である武漢と，華南の経済中心地である広州を結ぶ幹線鉄道として，1936年6月に開通している。同年9月にその運行を開始した後は華中・華南の交通網に大きな変化をもたらし，その影響は多くの分野に及んだ。例えば鉄道の開通によって，鉄道と連結する公路・水運などの交通体系に大きな変革をもたらしたのである。

その後，日中戦争が始まり上海・南京が陥落した。そして鉄道の北端である武漢は一定時期に中国側の軍事的・政治的な中心となり，鉄道の南端である広州は中国にとって唯一残された主要海港となったのである。そのため，粤漢鉄道とそれに連絡する交通網は，1938年10月に武漢・広州が日本軍によって占領されるまでの一時期，極めて特殊な政治的・軍事的・経済的価値を有していた。両都市陥落後，その役割は華中南における中国の抗戦軍事輸送へと変容し，戦争末期の日本軍による大陸打通作戦によって粤漢鉄道沿線が占領されるにいたるまで機能した。本稿ではその粤漢鉄道を中心とする交通網に着目し，その開通と輸送が日中戦争全体にいかなる影響を及ぼしたか，破壊と占領過程の実態及び意義と限界について論じる。

まず序章で先行研究について述べる。華中・華南における交通網がどのような視点から考察されてきたか，日本，中国，欧米それぞれの研究状況を分析した。その結果従来研究不十分であった点を重点的に考察することにした。第一に粤漢鉄道開通による地域交通網に与えた影響，第二に日中戦争期の華中南における交通網の果たした役割，第三に日中戦争期の日本側と中国側双方の鉄道破壊と占領，第四に抗戦体制における粤漢鉄道沿線地域の位置付けを行うことを主要課題とする。

そして第一章では，近代以降の華中・華南における交通網形成の過程とその背景に言及し中国における当地域の重要性を述べた。いわばアヘン戦争以降の華中・華南は政治的・経済的に混乱した時期が続いていた。とはいえ清末から民国期を通して当地域の交通建設は重視され続け，各種の計画が存在していた。こうした試みは南京政権期（1927年～1937年）に至り，ようやく鉄道敷設工事が開始されることになった。当時期の政治的混乱と鉄道建設の相互関連について重点的に考察を加えた。

第二章では，中国全土で進められた交通建設のなかで最重要視されたのが粤漢鉄道の建設・開通であり，それによる周辺交通網への影響を明らかにした。河川航路による水運を中心としていた交通網が，鉄道を中心とし公路が有機的関連をもちながら，各地域との連絡を行う形態に転換していく過程を解明した。

第三章では，日中戦争勃発前後に中国側が行った交通政策について実証的に論述した。国民政府による日中戦争勃発前段階の建設計画とその資金調達について言及し意義を指摘した。

第四章では，日中戦争期の中国全土における国民政府の交通行政を軸にしながら，そのなかで粤漢鉄道も含めた華中・華南の交通網が，どのように運営・破壊・復旧されていったかについて実証的に分析している。

その他，日本・中国双方の空襲による交通網破壊について史料『新華日報』（国民党統治区で発行された中国共産党系の新聞）を中心に明らかにした。日中戦争勃発後，華中・華南に対する日本軍の空襲は次第に増加し，南京陥落以降は激化した。この状況は武漢・広州陥落まで続き，その攻撃の主要目標は粤漢鉄道を中心とした交通網であった。また両都市陥落以後も，空襲は規模を縮小しながら継続した。日本側の戦略的な攻撃目標はさらに奥地の重慶・成都・昆明へ向けられたが，同時に華中・華南の交通網に対する小規模な空襲も続いたのである。一方中国側の日本側に対する攻撃も，米空軍の支援，及びその進出により次第に強化されていった。日中戦争の後半期である1944年以降，空襲による破壊は日本側の輸送体制を途絶させる。日本軍はその打開策として大陸打通作戦を決行した。

以上のように，日中戦争期における華中・華南は，日中双方の支配権争奪が繰り返された地域で，その重要性は「大後方」と日本占領地域の中間に位置する点にある。このような地域の交通網は，重慶を中心とする「大後方」を防衛・維持し，日中戦争における主要な抗戦体制を支える一面ともなったといえるだろう。

ロレンツォ・デ・メディチのパトロネージ

文学研究科歴史学専攻　西洋史研究（Ⅰ）専修　中　根　摩利奈

イタリア・ルネサンス芸術の発展を考える上で欠かせないのは，パトロンの存在である。パトロンとは一般的に後援者・保護者を意味するが，とくにルネサンス期では芸術家を経済的に援助する場合にこの名称が用いられる。その中でも，メディチ家がおこなったパトロネージは有名である。

コジモ・デ・メディチが政権を握った1430〜60年代のフィレンツェは，初期ルネサンスが発展を遂げた時期である。コジモの美術パトロネージは公用的・宗教的性格の強いものが多い。それまではフィレンツェ社会の集団的構造を反映して，都市政府などを中心とする公的パトロネージが主導的であった。私的パトロネージは，主として各個人が所属する信心会などの団体への寄付や，教区教会堂への寄進という形で行われていた。しかし1430年代以降，コジモはメディチ家が得た権力と富の主張を目的とするパトロネージ活動を展開する。

コジモは建築のパトロンとして，従来のパトロンとは異なる規模の活動をおこなった。その内容は大きく分けてふたつに分かれており，ひとつは公共の宗教建築物への後援，もうひとつは新しい自邸や別荘の造営である。宗教建築へのパトロネージは同時代の多くの銀行家と同様に，教会が表向き禁止していた高利貸業による不当な利益に対するキリスト教徒としての償いの意味を持っていた。こうした教会への慈善活動には，キリスト教徒として，生前のおこないによって天国に行きたいという願望と，権力者としての気前の良さを示そうとする政治的意図が込められていた。

コジモの孫であるロレンツォ・デ・メディチが，フィレンツェの実質的な支配者とみなされていた1470〜80年代は，芸術文化の黄金時代だったと言われている。ロレンツォが実質的な支配者としてフィレンツェ社会に君臨していた時期に，華麗なルネサンス美術の華が開いていった。

しかし，ロレンツォの時代には大規模な建築パトロネージが大幅に減っており，祖父のコジモの時代に見られるようなメディチ家による積極的な建築活動は後退したと言われている。これはメディチ家の全般的な財政難や，メディチ家の政権誇示に対する市民の反発を政治的に考慮してロレンツォ自身がそれらを制御したことが理由だとされている。

これらの点を考慮すると，祖父コジモとのパトロネージと比べて，ロレンツォのパトロネージは消極的であったと捉えられることもできるであろう。

だが，ロレンツォのパトロネージは彼以前のパトロンたちとは明らかに違う特徴がある。それは芸術家たちの国外派遣である。ロレンツォはコジモのように，フィレンツェの都市内での公私の建築物の造営や，絵画装飾に芸術家を活用するよりも，他都市の政府や君主の要求に応じて，フィレンツェの芸術家たちを次々に推薦し，彼らの国外での仕事を間接的に斡旋した。15世紀前半にも，フィレンツェの芸術家たちは他都市に招かれて活動していたが，彼らの多くが共和国政府や各都市の代理人，教会組織を通じて招かれていたのに対し，ロレンツォの時代では大半の芸術家たちがロレンツォ個人の推薦や紹介によって他都市に派遣されていた。

ロレンツォは，1480年にナポリ王フェランテの依頼により建築家ジュリアーノ・ダ・マイアーノをナポリに派遣，教皇庁には1481年にシクストゥス4世の要請で，ギルランダイオなどを派遣している。ミラノでは《フランチェスコ・スフォルツァ騎馬像》の依頼に，制作者としてレオナルド・ダ・ヴィンチを推薦した。ヴェネツィアには1482年頃，ヴェネツィア政府の要請でヴェロッキオを推薦した。イタリア国外では1492年に，ポルトガル王ジョアン2世の要請により，彫刻家であり建築家であったアンドレア・サンソヴィーノを派遣している。

ロレンツォのパトロネージを政治史の視点からみてみると，芸術家の国外派遣という特異性が際立っている。しかし，当時の有力者のパトロネージにおいて政治的な意図は全く切り離して考えることの出来ないものであり，パトロネージを純粋に芸術の支援のみと考えることは難しい。

ロレンツォのおこなった芸術家の国外派遣は，成熟した自国の文化を他国で披露することによって，フィレンツェという都市の宣伝をおこなった。ロレンツォが持っていた人脈を使い，他国の君主などに芸術家を派遣する代わりに，政治的な利益を受けていたとも推測できる。これは，一面で現代の国際交流の中で芸術が果たしている役割と共通している。

コジモ以前のパトロネージに含まれていた政治的な意図は祖国の壮麗化に貢献し，ロレンツォのパトロネージに含まれていた政治的な意図がそのプロパガンダとなった。このようなふたつのパトロネージの違いにはっきりとした使い分けの意図はなかったように感じられる。しかしそこには，今日に至るまでのイタリア美術の発展と，現代における芸術を通した国際交流の基礎とも呼びうるものが見出されるのではないだろうか。

ユーゴスラヴィア・ソ連対立の起源

文学研究科歴史学専攻　西洋史研究（Ⅱ）専修　椿　　佑　介

先の卒業論文「ユーゴスラビアとアジア・アフリカ関係」において，「チトー主義」が成立した1950年代以降のユーゴにおける労働者の自主管理による社会主義や，チトーによってアジア・アフリカ諸国を主とした「第三世界」という東西いずれの陣営にも属さない国々との関係を形成する非同盟外交が展開されるまでの流れについて論じた。今回の修士論文においては「チトー主義」が形成された要因として考えられるユーゴスラヴィアとソ連，ひいてはチトーとスターリンの対立について，第二次世界大戦期のユーゴ内戦から戦後のユーゴ情勢を踏まえて論じ，そして両国の対立の起源が，チトーが当初から持ち合わせていた，独自の行動力の強さにあることを結論として出していく。

まず第1章においては第二次大戦以前のユーゴ・ソ連関係について，1930年代においてチトーがユーゴ共産党指導部を立ち上げる過程から考察した。内容としては，ユーゴ共産党には入党する以前までのチトーの生い立ちやユーゴ共産党においてチトーが共産党指導部を立ち上げるまでの他の党有力者との競争，そしてチトーがユーゴ共産党指導部を立ち上げた以後のユーゴ・ソ連関係についてである。この当時のユーゴ・ソ連関係についてであるが，1930年代のソ連においてはスターリンによる大粛清によってスターリンに反発する者への処刑が頻繁に行われている真っ只中であり，チトーはこうしたスターリンの大粛清について異質なものだと考えていたことから，ソ連とのつながりを薄くすることを考えた。それがスターリンが代表を務めていたコミンテルンからの資金援助の停止を申し出ることであった。これがチトーが後にユーゴにおいてスターリンの指導とは別の共産主義国家を目指すきっかけであると私は考えている。

第2章においては，第二次大戦中のユーゴ・ソ連関係について大戦開始当初からのものとイギリスがユーゴ内戦に本格的に介入するようになった1944年以降のものに分けて考察した。まず大戦当初のユーゴ・ソ連関係については，1942年2月のソ連によるパルチザンへの支援問題や1942年11月，1943年11月のAVONJ（ユーゴスラビア反ファシスト協議会）における戦後のユーゴに関する決議をめぐるパルチザンとソ連の対立について論じた。また1944年以降については，パルチザンとイギリスの関係について論じつつ，それがパルチザンとソ連の関係に与えた影響について論じた。これらの点から，チトーが戦時中からイギリスをはじめとする外国やユーゴ王国政府といったユーゴにおける他勢力との交渉を，ソ連による反発をかわして行ったことが，チトーが戦後に外交上のイニシアチブを握ることにつながり，ユーゴ・ソ連対立の要因の一つとなったのである。

第3章においては，戦後のユーゴ・ソ連関係について，戦後のユーゴ国内の経済や外交を通して考察した。まず経済面においては1947年5月にチトーが掲げた五カ年計画をはじめとした経済復興政策に触れつつ，ユーゴ官僚であったヘブラングやユヨビッチといったチトーの経済政策に反感を持っていた人物の動向にも注目し，外交面においては，アルバニアとの経済協力やギリシア問題，ユーゴ・ブルガリア間の連邦化構想について述べた。しかし，特に重要であった点は，チトーの自主的な政策の基幹を成しているユーゴ独自の人民民主主義が「下」から，具体的には第二次大戦中に形成された大衆による人民戦線によってなされた点である。これらの事実は先に挙げたユーゴの経済・外交政策の展開に大きな役割を果たした一方で，ソ連のユーゴ・ソ連の社会主義に対する考え方の表面化を生み出したことから，ユーゴ・ソ連対立を決定付けた有力な要因の一つであると私は考えている。

以上の点から私は，ユーゴ・ソ連の対立は第二次大戦前においてチトーがスターリンによるユーゴ共産党への支配から脱却し，ユーゴ共産党の考えによるユーゴ政策を行うことを考えたことに起源をもつと結論した。この要旨では，細かい部分を端折ってまとめたため，いくぶん分かりにくい点もあろうが，ユーゴ・ソ連対立について少しでも興味を示してくれることを願い，この要旨の結びとする。

日本列島における石鏃出現の構造

文学研究科歴史学専攻　考古学研究(Ⅰ)専修　久　保　友香理

本論では縄文時代に登場する石鏃の出現が南九州からとする研究者が多い中，多系であるとする研究者もいることから，実際はどのような出現過程を辿るのかを探るべく，出土事例から石鏃及び尖頭器類の技術，石材，形態を中心に分析を行い，尖頭器類と石鏃の関係を今一度検討して縄文時代草創期の石鏃とはどのようなものかということについて考察した。また，日本列島の縄文時代草創期における所謂石鏃（無茎三角鏃）に関して，渡来石器である可能性や当時の環境も含め，出現の構造について考察を加えた。

第Ⅰ章では石鏃の先行研究を平面形態・大きさ・石材による分類研究，分布・地域性に関する研究，加工・技術に関する研究，狩猟環境に関する研究，そして石鏃の出現に関する研究に分けてまとめた。これにより，石鏃研究の動向及び2点の問題点が浮かび上がった。その1点は先述のように石鏃の出現が実際に南九州のみであったのかという点，もう1点は石鏃と尖頭器類がどのように影響しあったのかという点である。

第Ⅱ章では織笠昭の『花見山型有茎石鏃・有茎尖頭器形態論』の再検討を行い，縄文時代草創期の石鏃の定義を見直した。織笠の論文では神奈川県花見山遺跡等で出土する身部短形有茎尖頭器と石鏃を大きさ等の類似性からこれらを石鏃として定めた。これは縄文時代草創期の石鏃と有茎尖頭器の分類を見直したという点で評価できるが，これこそがこの論文の問題点とも言え，形態が異なるにも関わらず大きさが近いから身部短形有茎尖頭器と石鏃を同じ「花見山型石鏃」としているのである。その他にも，共伴土器や層位を考慮せず，全ての有茎尖頭器及び石鏃を同列に扱っている，石材や加工をあまり重視することなく「花見山型有茎尖頭器」と「花見山型石鏃」を設定しているという問題点も挙げられる。これらの問題点をふまえて現在の神奈川県域を中心に「花見山型有茎尖頭器」が出土する遺跡について検討を行った。その結果，双方形態以外にも共通点が見られたが，同様に相違点も見られたことから，形態が異なるにも関わらず大きさが同じ位というだけで機能を推定するのは尚早であり，完全に決定づけられない限り縄文時代草創期において有茎のものは「有茎尖頭器」，無茎のものは「石鏃」としておくべきであると結論付けた。

第Ⅲ章では日本列島において石鏃の初源期はどのような状況だったのかという視点から各地の石鏃及び共伴する石器の様相と大陸の様相，そして環境変化から石鏃出現の構造について検討した。結果として，日本列島における石鏃の出現は大平山元Ⅰ遺跡や日向洞窟の例からスクレイパー及び尖頭器の折損品を転用したものである可能性があり，石刃素材のスクレイパーはシベリアから沿海州地域にかけて広がるオシポフカ文化で見られることから大陸由来と考えられるが，この時期のオシポフカ文化では無茎の石鏃がないため無茎石鏃としての形態は日本列島内で改良されたと言える。ただ剥離技法は大陸から渡ってきたものと考えられ，また，同時期に弓矢の技術も得たと考えられる。一方，九州地域に石鏃が見られるようになる時期には大陸でも無茎平基鏃が見られるようになるが，加栗山遺跡では無茎凹基鏃も見られるため，本州との関連性が伺われる。しかし，磨製技術は大陸で本州には見られない全面磨製の石斧が存在するため大陸のものと考えられる。そして環境変化の面では気候と植生の変化は動物相の変化と時期が連動する訳ではなく，石鏃の出現，増量は九州地域からということは考え難い。また，草創期の石鏃は無茎平基もしくは浅く抉れる凹基で在地石材を利用するものが多いが形態や加工等で地域性がかなり出るものと考えられる。本州と九州地域でも共通点，相違点共に見られるが，本論で新たに提唱したい共通点として，石鏃出現以後の草創期初頭の資料は当初大きく製作されていたものの数量が増えていくにつれて小さくなっていき，小さくなりすぎたところで揺り戻しが起こりまた大きくなったことが挙げられる。

第Ⅳ章は結論である。本論では日本列島における石鏃を無茎三角鏃と定めた上でその出自について検討し，そして石鏃の出現は南九州からとする研究者がいる中で東北地域からという可能性を示した。ここでは石鏃の出現は地域的には一系ということになったが，出現時期が早ければそこから必ずしも全ての地域に技術が広まるとは言えず，九州地域には独自の文化系統が存在し，細石器の伝播からも分かるように本州とはまた異なる大陸との交流ルートも存在したであろう。しかし，九州地域にも本州の神子柴型石斧が見られる例があり，本州との交流は疑いなく，年代の枠を取り払って考える必要があるのかもしれないため，これを今後の課題とした。

伊勢湾周辺地域における後期初頭土器群の成立と展開

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅰ）専修　野々山　禎　久

はじめに

現代社会においての東海地方は東西両地域の文化が交わる地であり，東西交渉が行われ独自の文化をも生み出している。これは現代社会だけでなく縄文時代においても同様のことが言える。特に縄文時代後期の土器をみると，それまでの地域性が薄れ，同様の特徴を持った土器が全国規模で流行する。後期初頭には「磨消縄文」手法を持つ土器が盛行し，関東地方を中心に分布する称名寺式と，中国・四国地方，山陰地方を中心に分布する中津式を中心に研究が行われており，両者の関係性が指摘されている。本論では両地域の中間である東海地方の中から伊勢湾周辺地域の資料を取り上げ，後期初頭土器群の成立・展開と地域性，そして称名寺式・中津式との関係性について言及していく。

対象資料と分析方法

伊勢湾沿岸地域の遺跡（愛知県 3 遺跡・三重県12遺跡）から出土した中期末から後期中葉にかけての土器を用いて編年表・変遷図を作成し，対象地域での「磨消縄文土器」の成立と展開を探るとともに，当該期の関東地方および中・四国・山陰地方のそれと比較検討を行う事で地域性や関係性を導き出していく。

伊勢湾沿岸地域における磨消縄文土器の成立と展開

伊勢湾周辺地域における後期初頭磨消縄文は，中期末に近畿地方東部～東海地方西部に分布する北白川Ｃ式や咲畑式，中富・神明式に見られる口縁部区画文や沈線渦巻き文への縄文あるいは沈線文充填に端を発している。この充填文が胴部まで及び，磨消縄文へと変化していくと考えられる。そしてその変化は伊勢湾周辺地域の資料を見る限りでは，西方でより早く始まり，次第に東方へと広がっていく様相が窺える。

磨消縄文はＯ字状やＪ字状の主要モチーフを残しながら，縄文帯の拡大・複雑化→沈線施文の省力化・直線化といった変遷をたどる。この変遷は西日本に広く分布する中津・福田ＫⅡ式の変遷と同様であると言える。

地域的特徴

伊勢湾周辺地域の磨消縄文土器の中には「縄文充填」ではなく，「櫛描条線文充填」や「疑似縄文充填」のものが多く見られる。これらは，当該地域で中期末段階から一般的に見られる粗製土器への櫛描き状の条線や条痕，疑似縄文を施す手法を引き継ぎ，帯状沈線内への充填文として転用したものと考えられる。

また，瀬戸内・山陰地方での中津式は充填される縄文がRL 優勢となるのに対して，伊勢湾沿岸地域では全体的にLR 優勢となる。中津式の祖形となっている北白川Ｃ式では縄文LR が圧倒的に優勢となる事実が確認されており，北白川Ｃ式の主要分布域であった近畿地方東部から東海地方西部にかけての地域ではそれ以後も縄文LR が強く支持された結果として，磨消縄文土器の充填縄文LR 優勢という地域性を生み出したと想定される。

型式間における影響関係

以前から関東系土器群と関西系土器群が相互に影響し合って中津式と称名寺式土器を成立させたとも言われてきた。本論においても北白川Ｃ式と加曾利Ｅ式系の接触の痕跡が認められ，加曾利Ｅ式系から北白川Ｃ式への影響は想定できたが，その逆のパターンは無かったものと思われる。つまり，北白川Ｃ式と加曾利Ｅ式との接触は中津式の成立の一要因となったことは考えられるが，称名寺式の成立には関係していないものと考えられる。

中津式と称名寺式の成立に関する直接的な影響関係としては，中津式の東進現象が確認できたが，中津式が称名寺式よりも早く成立したとする決定的な根拠は得られていない。称名寺式中津タイプが関東地方南西部のみに分布することも留意すべきであるが，称名寺式中津タイプの紡錘文は加曾利ＥⅢ式あるいはＥⅣ式で見られる胴部文様「逆Ｕ字状文」からの変化，または称名寺式のＪ字文からの変化と捉えることも可能である。中津式との接触があった可能性も否定できないが，称名寺式中津タイプは称名寺式最古段階までは遡らないものと考えられる。以上のことから称名寺式の成立に際して中津式の影響はなく，成立後間もなくしてから接点を持つようになったと想定される。

中津式と称名寺式の成立後は，東京都で中津式に組成する双耳壷が，東海地方・近畿地方で称名寺式に比定される土器が出土しているため，積極的な交流があったものと考えられる。

しかし，両型式の接触の痕跡が見られるのは，成立直後段階から第１段階の縄文帯と無文帯の反転現象が起きるまでのわずかな期間であり，それ以降は接触の痕跡が見られなくなる。後期前葉から中葉にかけて関東系土器（称名寺式最終段階から堀之内式）の大量流入が発生するまでは型式間の交流が断絶していたと言える。

まとめ

伊勢湾沿岸地域における後期初頭土器群「磨消縄文土器」から読み取れる成立過程および編成過程と地域的特徴について言及した。また，中津式と称名寺式との関係性については，以前から指摘されてきた事象について東海地方からの視点での再検討を中心に行った。いずれも十分な検証とは言い難いが，上記のような結論に至った。しかし，更なる詳細な検証と土器以外の遺物を含めた総合的な検証も必要であり，今後の課題である。

縄文時代中・後期における出入口部から見た建物遺構の構築的研究

文学研究科歴史学専攻　考古学研究（Ⅰ）専修　古　川　亜友美

今回は，東北地方と関東・中部地方における縄文時代の中から後期にかけて存在する建物遺構である柄鏡形（敷石）住居址や環状列石などの施設の「出入口部」という視点に注目して研究する。建物遺構の出入口部を時期ごとに分類し流れを観察し，形態など特徴を挙げて比較検討し，相違点や類似点などを挙げ，その関連性について考える。そして縄文時代の人々にとって建物構造に付随する出入口部の用途や役割，存在意義について考えたい。

第 1 章では縄文時代中期から後期にかけて，一般的に見られる各種遺構について概説的に述べる。その際，縄文時代の人々の生活内での役割や利用，意味合いにより生活形態を住居・集落・共同墓地・共同祭祀に分類して，時期，種類，形態，分布地域など特徴を述べた。

第 2 章では柄鏡形（敷石）住居址，環状列石，環状木柱列について具体的な遺跡の事例を挙げて時期・形態や出土遺物など遺跡全般から各遺構について詳しく見た。

第 3 章では各遺構の出入口部を形態等から比較分析を行った結果，出入口である張出部の形態がハの字状やヒゲ状のように外側に開く形や，石や礫，木柱で環状に遺構全体を囲む行為が類似している。柄鏡形（敷石）住居址の主体部と張出部の連結部から左右に広がる列石が付随する事例が環礫方形配石遺構や周堤礫の前段階の形態にあたり，弧状列石遺構と類似するとも考えられる。柄鏡形（敷石）住居址の張出部は細長い楕円形を呈していたが，時期が新しくなると共に，ヒゲ状，ハの字状，凹・凸字状の形態に変化した。出入口部が開き，閉ざされた空間から開かれた空間への移行と捉えられる。柄鏡形（敷石）住居付設弧状列石は，出入口部の領域を拡大し，列石が横や下方に伸び，個人の居住域を広げる。環礫方形配石遺構や周堤礫を伴う柄鏡形（敷石）住居址は，張出部から列石が左右から主体部へ伸び，そして張出部を含め住居全体を囲んで配石する。壁柱穴を覆うように方形に配石した後，火入れ行為と周堤礫の構築，上面配石をする。これは住居を外界と切り離すために列石で区画する隔絶や隔離行為，または廃屋儀礼や動物供犠に関わる祭祀行為の可能性もある。

環状列石や環状木柱列は大人数で集会や祭祀など儀礼行為を行う場所と考えられる。環状木柱列の主体部や環状列石を円形に呈し，出入口部は環状木柱列がハの字状に外側に開く門扉状遺構を呈する。環状列石はハの字状やヒゲ状に開く場合と直線状の場合がある。ヒゲ状の形態は出入口が一度，狭くなってから左右に大きく広がる。この形にした理由は出入口を狭くして敵の侵入を防ぐためかもしれない。環状列石は墓地説や祭祀施設など特殊な機能を持つと考えられ，環状に礫を配石する事で環状列石の内外を区画し，日常空間と祭祀や儀礼行為を行う非日常空間を隔離して切り離された神聖な空間を作ることが目的だと思う。張出部による出入口は環状列石が造られている集落内や周辺の集落で信仰する神や祖先が通る道を示す信仰的な意味を持つかもしれない。

次に出入口部が付設され方位に着目したところ，南西または南の方向に張出部を持つものが最も多い。環状列石は北と南の 2 方向が向き合う張出部や列石の隙間が造られている。意図的に主体部を北向き，張出部を南向きにして造ったと思われる。また，柄鏡形（敷石）住居址の張出部が環状列石や中央広場の方向を向いていることから張出部が突出する方向の先にあるものを意識していたとも考えられる。

第 4 章では，出入口部は建物の施設内の外側と内側を区画する存在である。住居は同じ集落の人々との共同作業の場が外側であるのに対し，住居内の空間が家族と想定される最少人数が集まった小集団の空間であり，食事や睡眠，家族の団欒など住人同士のコミュニケーションを取る場所を内側と捉えることが出来る。

環状列石や環状木柱列は，施設の外側は集落の人々の仕事など共同作業の場である日常的な空間に対して，施設内部を祭祀や儀礼行為，集会など，特殊な目的を持つ行為を大人数で行う非日常の空間と捉える。この 2 つの空間を繋ぐ存在，そして，2 つの境界として出入口部が存在すると思う。出入口はモノとモノとの間に，何も無い空白の場所によって造られた道があれば，人は普通に通ることが可能である。しかし，大変な思いや労働をして石や柱，それを埋めるための土坑を用意して造るということは，縄文時代の人々は，出入口に特別な想いを抱いていたと考えられる。つまり，敢えて出入口に施設を伴わせて，出入口部を張出部などで形作ることで，出入口という目に見えない外側と内側の境界を具現化することに意味があったと思う。縄文時代の人々にとって出入口部は自分の世界と他人の世界を区画する意味を持っていたのではないのかと思う。

後期旧石器時代のナイフ形石器文化終末期における石器群の変遷に関する一考察

文学研究科歴史学専攻　考古学研究(Ⅰ)専修　安　井　　充

南関東地方において相模野第Ⅳ期（矢島・鈴木 1976）ないし Phase Ⅱ b（小田・キーリー 1975）と称されたナイフ形石器文化終末期は，出土層位の違いやナイフ形石器の形態等により，前半を砂川期（田中 1979），後半を月見野期（白石 1995）として二分される様相を持つことが明らかになった。一方で，月見野期の特徴とされた石槍とナイフ形石器に見られる製作技術上の共有関係が，砂川期に属するナイフ形石器と石槍の一部でも確認されたことを始め，言わば「砂川期に見られる月見野期的様相」も明らかになって来た。砂川期と月見野期の様相が接近するに従い，両時期を分かつ画期の所在について，改めて検討を加える必要が出て来たと言えよう。

砂川期から月見野期に至る過程で見られる石器群の変化は，二側縁加工のナイフ形石器における形態，主体となる利用石材, 石槍の素材と加工形態等に集約されよう。

砂川期と月見野期に見られる二側縁加工のナイフ形石器は，刃部と側縁部の成す角度に左右される平面形態の違いから，急斜刃系，緩斜刃系，平刃系の三系統に区分される。平刃系ないし緩斜刃系二側縁加工のナイフ形石器は，長らく側刃器としての用途を考えられて来たが，製作上の特徴として，①縦長剥片を横位に用いて折断を加え，両側縁にブランティングを施す。②基部裏面の平坦剥離に乏しい。③器体の幅は個体によりバラエティーに富むといった点が挙げられよう。平・緩斜刃系二側縁加工のナイフ形石器は，木製ないし骨製の柄の側縁部に彫り込まれた溝に取り付けられたと想定されるが，樹脂等の固定剤を用いれば，器体の厚さないし幅を均一に保つ必要がなかったのであろう。また，平・緩斜刃系二側縁加工のナイフ形石器は，砂川期と月見野期の両時期を通して大きな形態変化が見られず，同様の用途を持っていたと言えよう。一方で，砂川期における急斜刃系二側縁加工のナイフ形石器は，器体を薄くする基部裏面の平坦剥離に富み，器体の幅は均一性があり，製作上の規格性が見て取れる。これらの特徴は柄の先端に取り付ける際の利便性ないし柄の先端が持つ幅に影響されたものと想定され，ヤリの穂先に取り付ける刺突具を思わせる。しかし，月見野期に至ると基部に素材の打面とバルブを残し，器体の幅に見られた規格性は失われる。言わば，平・緩斜刃系二側縁加工のナイフ形石器に近似する特徴を持つようになるのである。換言すれば，月見野期では二側縁加工ナイフ形石器の用途が，概ね側刃器に統一されたと言えよう。

利用石材に目を転じると，砂川期の平・緩斜刃系二側縁加工のナイフ形石器に代表される小形のナイフ形石器には信州産で良質の黒曜石が用いられ，中形ないし大形の急斜刃系二側縁加工のナイフ形石器には在地系のチャート，凝灰岩，粘板岩等を用いる傾向が見て取れる。一方の月見野期では，利用石材は概ね質が劣る伊豆・箱根産の黒曜石に統一される様相を持つ。

また，砂川期における石槍の多くは大形ないし中形のナイフ形石器と同様に在地系石材を用いている。ナイフ形石器と素材を異にし，加工形態は両面加工が主体を占める。月見野期に至ると，石槍の利用石材と形態に変化が見られ，ナイフ形石器と同様に伊豆・箱根産の黒曜石が利用石材として主体的に用いられると共に，ナイフ形石器と素材を同じくし，小形化が進む。加工形態は両面加工に代わって，半両面加工，片面加工，周辺加工が盛行する。

これらの変化は，先述の急斜刃系二側縁加工のナイフ形石器に見られる用途の変化に影響されて生じたものと思われる。砂川期では側刃器に代表される小形のナイフ形石器には信州産の黒曜石を用いる伝統が見て取れた。月見野期に至り，急斜刃系二側縁加工のナイフ形石器を含む側刃器の量産を図るに当たり，質は劣るが黒曜石原産地として比較的近場で，ある程度の大きさを持つ原石を期待し得る伊豆・箱根産の黒曜石を用いることにより，「側刃器を黒曜石で製作する」という伝統を保持したのであろう。また，刺突具としてのナイフ形石器の衰退は石槍の量産を招いたに違いない。しかし，「石槍をナイフ形石器と同じ石材で製作する」という砂川期の伝統に従うと，在地系石材よりも希少な伊豆・箱根産の黒曜石で石槍を量産する必要が出て来よう。こうした石槍の需要増加と限りある石材のバランスを取る妥協策として，一時的に両面加工を衰退させ，半両面加工，片面加工，周辺加工といった加工形態を積極的に取り入れたと考えられよう。つまり，構造的に多くの共通点を持つにも関わらず，ナイフ形石器文化終末期を砂川期と月見野期に二分させる特徴を石器群に与えた画期の所在は，急斜刃系二側縁加工のナイフ形石器における「刺突具から側刃器へ」という用途の変化に集約されるのである。

EFL 環境における日本人英語学習者の語彙連想

――反応種類の移行とネイティブの規準との比較――

文学研究科英語圏文化専攻　英語英文学研究（Ⅰ）専修　吉　戸　昌　和

私たちは数多くの語彙の知識を心内辞書（メンタルレキシコン）に蓄えている。蓄えられた語彙同士はメンタルレキシコン内でどのようにつながっているのだろうか。メンタルレキシコン内では，紙の辞書のようにアルファベット順に単語が並んでいるわけではないが，単語間で蜘蛛の巣のように構造化され，ある規則性を持って並んでいると想定されている（Henriksen, 2008）。L1のメンタルレキシコンの構造にL2のメンタルレキシコンの構造が近づいていけば，スピーキングやライティングの際に表現が円滑に行われるのではないだろうか。

語彙同士がメンタルレキシコン内でどのようにつながっているのかを調べる一つの方法として語彙連想テストが用いられてきた（Fitzpatrick, 2006）。一般的な語彙連想テストは，ある単語（刺激語）が提示された時に，最初に思い浮かんだ単語を答えるというものである。被験者から示された反応は，多くの実験において clang（音による連想）, syntagmatic（連辞的連想）, paradigmatic（系列的連想）に分類されてきた。

本研究では，日本人英語学習者を熟達度の高いグループと低いグループに分けて語彙連想テストを行い，日本人英語学習者の連想反応にどのような特徴があるのか，また彼らが示した連想反応は英語母語話者の標準的な連想反応（canonical association）とどの程度一致するのかを検証した。結果は，被験者全体では，syntagmatic な反応が paradigmatic な反応よりも有意に多かったが，paradigmatic な反応に関しては，上位群は下位群より有意に多い canonical な反応を算出した。L2学習者の場合，syntagmatic な反応が多いが，L1話者のように，英語力が向上すると syntagmatic な反応から paradigmatic な反応にシフトすることが分かった。また，L1話者の canonical な反応に関しては，上位群の方が下位群より canonical な反応を多く産出したが，両群とも英語力との有意な相関は見られなかった。しかし，被験者全体の英語力と canonical な反応との間の相関係数を算出したところ，弱い相関（r=.409, p<.01）が見られた。上位群のメンタルレキシコンの方が下位群のメンタルレキシコンよりも構造的にネイティブのメンタルレキシコンに近づく傾向があると言えるであろう。

刺激語の品詞や頻度によって連想反応にどのような影響があるのかということも分析してみた。結果は，刺激語が名詞の場合，paradigmatic な反応が有意に多く，それに反して，形容詞の場合，syntagmatic な反応が有意に多く産出された。このことは，名詞に対して名詞の反応，形容詞に対して名詞の反応が示される傾向にあることを示している。頻度に関して言えば，1000語レベルと2000語レベルの語に対する反応を比較した結果，syntagmatic な反応において2000語レベルの反応が有意に少なかったし，その分2000語レベルの刺激語に対して no response（空欄）や理解不能な反応が多かった。語の頻度が低くなり難しくなるほど，被験者は反応を示すのが難しくなると想定される。これらの結果から，刺激語の品詞や頻度が連想反応に影響を与えることが分かった。

アリスの世界とそのキャラクターたち

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究（V）専修　齊　藤　雄　多

この論文の目的はルイス・キャロル（Lewis Carroll），本名チャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン（Charles Lutwidge Dodgson）が著し，今や全世界で有名になっている『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures In Wonderland*）（1865）とその7年後に出版された続編である『鏡の国のアリス』（*Through the Looking-glass And What Alice Found There*）（1872）に登場するキャラクターたちを主に取り上げ，分類し分析した上で不思議の国と鏡の国という世界そのものやキャラクターの比較を考察することである。キャラクターたちの姿や性格, 特徴, 仕草を調べて理解することにより作中での役割やストーリーの面白さ，おかしさ，世界観も考察していく。

『不思議の国のアリス』について聞けば大体の人が知っていると答えるだろう。およそ150年が過ぎた現在でも有名になっているのは何か理由があるに違いない。この物語には読者の想像力を刺激し，謎を問いかけてくるシーンがある。子どもたちだけでなく大人も楽しめるような工夫が魅力のひとつである。映像化も幾度となくされており，その中でもディズニーのアニメが有名なのはご存知のとおりである。このことからもアリスの人気は衰えていないことがわかる。

本論文は4章構成で論ずる。1章では2つのアリスの物語を作るにあたって，ルイス・キャロルという人物がどのような人であったかを述べる。また，キャロルの人生や趣味の写真についても整理する。2章では『不思議の国のアリス』の物語やキャラクターたちを考察することで，不思議の国は狂気の世界であり狂っているキャラクターばかりな理由を論ずる。3章では『鏡の国のアリス』の物語やキャラクターたちを考察することで，鏡の国は逆転の世界でありキャラクターたちの考えも逆転している理由を論ずる。4章では2章と3章で言及したキャラクターたちの比較をし，世界そのものが性格に関わっていることを論じ結論まで結びつける。

2つのアリスに登場するキャラクターたちは皆ユニークで頑固者ばかりである。そして彼らの性格は，それぞれが属する世界に関連しているのがわかる。例えば，不思議の国は狂気の世界なので住人たちはどこか狂っていたり，鏡の国は逆転の世界なので住人たちは思考が逆転していたり，論理も逆転している。アリスという作品を読む上でキャラクターたちの存在は世界そのものを表しており，キャラクターが存在しなくなれば，アリスの世界もまた無くなってしまうのである。

そんなキャラクターたちだからこそ，物語に彩りを与え，面白おかしくしているのだ。彼らがもし何の変哲もない性格だったら物語はつまらなくなっていただろう。不思議の国や鏡の国というファンタジー世界には，このようなキャラクターたちが必要不可欠であり，その結果が唯一無二の存在となっていると論じた。

Microcredit and Women's Empowerment in Bangladesh

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究(VI)専修　Adity BARUA

This thesis deals with poor rural women in Bangladesh who borrow microloans for income-generating activities, especially those who are the poorest of the poor and try to empower themselves. The specific objectives of the study are to examine the renowned Grameen Bank's microcredit programs as a solution to poverty, and to suggest alternative measures for the poorest of the poor.

The majority of women in Bangladesh have yet to be empowered to participate actively in the social, cultural, economic, and political life of the country. Gender discrimination is widespread in all spheres and at all levels, as indicated by official statistics on health, nutrition, education, employment, and political participation. In family matters such as marriage, divorce, custody, maintenance, and inheritance, people discriminate against women.

In this situation, governmental and non-governmental organizations in many countries have recently introduced so-called microcredit programs targeted to the poor, especially to the women, with the view that they are more likely than men to be credit-constrained, have restricted access to the wage labor market, and have an inequitable share of power in household decision making.

In Bangladesh Dr. Muhammed Yunus started to offer small loans to the rural women in 1976. Providing loans for the poorest of the poor, especially for women, through banking services for the poor women's income-generating activities, Grameen's microcredit programs have become well known as a social development strategy. The microcredit programs have made it easier for poor people to get loans for their entrepreneurship. Dr. Yunus was awarded the Nobel Peace Prize for his contribution in "poverty alleviation" in 2006.

There are, however, many problems in the microcredit programs behind worldwide applause. For poor people, poor women in particular, it is quite difficult to keep up with their loan repayment schedule because of the bank's high interest rate. The joint liability of group members is like a type of collateral, although it is a safe guard for the bank. Despite the Grameen Bank's initial objectives, women's lack of household control, which is deeply rooted in local cultural environments, hampers the improvement of the socio-economic conditions of the households. Microloans are nothing but debts for the poor household and they do affect the family's expenses.

Insofar as microcredit is not at all a panacea for poverty alleviation and women's empowerment, any complementary or alternative means should be explored. In order for these measures for poverty reduction and gender equality to reach the poorest of the poor, the role of the state is vital. The government is expected to create an enabling framework where development interventions including microfinance can enhance and produce expected outputs.

It might take a long time to achieve poverty alleviation and women's empowerment in Bangladesh. Therefore we need comprehensive strategic and long-term plans, with the involvement of all the members of the society: local communities, government and non-government organizations, and private sectors.

妖怪の分類

文学研究科日本文化専攻　日本文学研究(Ⅱ)専修　服　部　希　望

河童や憑きもの・天狗・鬼など，日本の至るところに潜んでいる人知を超えた存在「妖怪」。その定義は非常に曖昧であり,研究者によってさまざまな考え方がある。何をもって「妖怪」とするのかが定まっていないため，特定の基準を設けて分類するということが非常に困難である。特に「幽霊」との関係性が争点とされており,「妖怪」と「幽霊」を区別して考えるか，「幽霊」を「妖怪」の一種ととらえるかで，分類の基準も大きく変わってくる。

また，その基準や分類方法もさまざまなものがある。例として，妖怪の形象の有無や，どのような形をしているか，あるいはどのようなものに姿を変える（化ける）のかを考える形態分類，山や水辺・家屋など，妖怪の出現する場所を基準とする分類，錯覚（偽物）か本物か，遭遇した人間が妖怪をどのように認識したのかによってその妖怪の虚実を判断し，区別する分類がある。これらの分類は，妖怪の持つ「形態」や「出現場所」といった「要素」を基準としているが,重要な要素であるはずの「行動」を用いた分類方法は残念ながら発見できなかった。本稿では新しい分類法の開拓の試みとして，「変化（へんげ）」「憑依（ひょうい）」「傷害」「病害（びょうがい）」「発音」「要求」「恩返（おんがえし）」「追跡」「妨害」「利害」「飛翔」「発光」「予言」「盗難」の十四の行動要素を設定し，それぞれに該当する妖怪の例を可能な限りあげている。

どの分類法も研究者独自の妖怪観にもとづいているため,各方法を用いて分類をしようとすると判断が難しく，思ったように分類項目にあてはめることができなかった。やはり妖怪を全体的に分類するためには，一つの基準に頼らず,「形態」や「出現場所」「行動」といった「要素」を組み合わせるほかないようである。妖怪の行動要素はまだまだこんな数ではない。妖怪の行動の要素（行動の「型」）を収集することが，より完全な妖怪の分類をつくるうえで重要ではないか。

宮沢賢治と音楽

文学研究科日本文化専攻　日本文学研究(Ⅱ)専修　山　下　晃　弘

はじめに

宮沢賢治は多くの魅力を持っている人間であると言える。それは童話作家，詩人，農業者，宗教家というさまざまな顔を持っているからである。天文，地質，鉱物の知識が豊富にあり，芸術や音楽にも関心があった。それらのすべての知識，経験が彼の作品に何らかの影響を与えていると言っても過言ではない。そこで今回，私はそんな数多くの魅力を持った宮沢賢治という人間を私の好きな音楽という観点から見ていきたいと考えた。

第一章　　宮沢賢治の生涯と音楽

宮沢清六の「兄賢治の生涯」の記述によるとレコード収集は農学校教諭時代から始まり，そして町一番のコレクターとなった。ベートーヴェンやショパン，チャイコフスキーの曲に取り憑かれるようになり，友人の藤原嘉藤治と一緒に聴いたりして音楽への情熱が高まってきた時期であった。(91年，宮沢清六「兄のトランク」筑摩書房）より。

多くのクラシック音楽を聴いていた賢治だが特に交響曲を好んで聴いていたとされ，その中でもベートーヴェンへの思い入れは強かった。賢治はベートーヴェンの作品を自分の作品の目標にしたのであった。

また賢治はレコードを集めるだけでなく自ら歌曲を作っており，自作の劇や歌を生徒に演じさせたり，一緒に歌ったりもした。

第二章　　作品の中に見られる音楽的要素

賢治の音楽的影響は彼の作品にも反映されている。まずひとつは作品の中に出てくる音楽用語が挙げられる。「セロ弾きのゴーシュ」では「第六交響曲」「トロイメライ」が登場し，「銀河鉄道の夜」では「新世界交響楽」が登場する。

その他の音楽的影響は作品の中に出てくる詩や歌のやりとりである。賢治の作品には歌のやりとりがしばしば登場する。この歌のやりとりによってテンポの良さや臨場感を醸し出す効果につながっているように感じる。

また彼の詩はとてもリズミカルであり，繰り返しが多く擬音語が多く使われているのが特徴である。童話「雪渡り」は子狐と人間の子どもが歌のやりとりによって交流するが，佐藤泰平氏はこの作品に対し，わらべ唄の影響を指摘している。(講演要旨　宮沢賢治の詩・童話と音楽―童話「雪渡り」を中心に― 佐藤泰平，平成11年）より。

賢治の育った岩手県は昔から伝わる民話や民謡，わらべうたの宝庫である。民話や民謡，わらべうたの連続リズムを幼い時に聞き続けた賢治にはクラシック音楽に夢中になる以前に日本の音楽にも影響を受けていたことになる。

第三章　　物語の構成と音楽

賢治が受けた音楽的影響は彼の作品の構成にまで影響を与えたと言える。彼の音楽経験が反映された「セロ弾きのゴーシュ」では音楽用語が出てくるだけでなく物語の構成にまで音楽が関係してくる。松岡由紀氏はベートーヴェンの「田園」の標題と「セロ弾きのゴーシュ」の構成が関連していると指摘した。(「銀河鉄道の夜」と「セロ弾きのゴーシュ」：晩年の賢治童話と音楽，松岡由紀，1987）より。

「田園」の五つの楽章には，ベートーヴェン自身によって標題が付けられている。第一楽章「田舎に着いて起る，はればれとした気分の眼覚め」，第二楽章「小川のほとりの場面」，第三楽章「農夫たちの愉快なつどい」，第四楽章「雷雨，嵐」，第五楽章「牧人の歌。嵐のあとの喜ばしい感謝にみちた気持ち」である。物語を楽章にあてはめてみると，第一楽章が〈第一夜，猫〉，第二楽章が〈第二夜，かっこう〉，第三楽章は〈第三夜，狸〉と〈第四夜，ねずみ〉，第四楽章は〈音楽会とアンコール〉，第五楽章，〈喜び，動物たちへの感謝〉となる。

このように「セロ弾きのゴーシュ」はベートーヴェンの「田園」に影響されて創られた物語だと言える。そこに賢治自身がオルガンやセロを習って上手に弾けなかった経験が投影されているのだろう。音楽の標題に影響されて創ったとすればとても斬新な発想であり，そこに彼の個性がある。物語の構成における起承転結のような展開を音楽から得たものとすれば，音楽が賢治に与えた影響は大きいものと言える。

おわりに

多くのクラシック音楽のレコードを所有し，ベートーヴェンの特に交響曲を好んだ賢治はその音楽観や音楽経験を作品に投影させていることがわかった。作品に出てくる音楽用語，そして歌のやりとりでの即興性，詩のリズム感，それらの特色が彼の独自性につながっていると私は考える。物語構成に音楽が影響を及ぼした作品はなかなか他に見つからないと思うし，音楽の知識を童話に投影させようと試みた作家も賢治の他にはあまりいないのではないだろうか。そういった意味においても賢治はやはり音楽性の強い作家であると言え，音楽色が色濃く反映された作品をたくさん残した人なのである。

ヒンドゥーの女神
――カーリー女神を中心として――

文学研究科日本文化専攻　日本文化研究(Ⅱ)専修　大　場　隆　佑

「母神」あるいは「女神」といえば，人々は美しく優しい女性像を思い浮かべるのが一般的であろう。しかし，ヒンドゥーの女神は，キリスト（西洋）の女神とは大きく異なる。なかには美しく優雅な女神もいるが，生血を好む恐ろしい形相をした女神も存在している。ヒンドゥー神話にはこの恐ろしい形相をしたカーリー女神という女神が存在する。特にベンガル地方ではカーリー女神は人気のあるスター女神であり，人々からの信仰も厚い。インドの長い歴史をみていくと男神中心の宗教形態から女神崇拝へと変遷していく過程でカーリー女神は一躍有名になっていった。それは何故かという疑問と，ヒンドゥーの女神の持つ宗教的機能や魅力を明らかにするために今回の論文の作成に至った。

では，論旨を順に述べていきたい。まずはじめに，女神崇拝の台頭を論点に入れているためにインド宗教史の時代区分を説明していく。インド宗教史は思想史の観点から見るならば，４つの時代に区分することができる。第１期は紀元前2500年～1500年のインダス文明の時代，第２期は紀元前1500年～500年のバラモン中心主義の時代，第３期は紀元前500年～後600年の仏教ジャイナ教などの非正統派の時代，第４期は紀元600年～1200年のヒンドゥー教興隆の時代である。以上が第１期から第４期までの時代区分であり，筆者が考察の対象とする女神崇拝の台頭とカーリー女神が活躍し始めるのは第４期に入ってからのことである。このように第１章では主にインドの時代区分と人々の生活様式やそれぞれの歴史について述べた。時代区分をみていくことにより，カーリー女神がどのような時代に活躍をしたのかが明らかとなるからである。第２章では女神崇拝についてのことと，ヒンドゥーの女神を取りあげて説明を加えていき，本題の第３章へと繋げていった。まず一般的にみられるカーリー女神の特徴を述べていきたい。

「ふりあげた第一の右手に血のりの着いた剣を，第二の右手には三叉戟を，第一の左手は切り取られた生首を持ち，その生首から流れ落ちる血を受ける頭蓋骨を第二の左手が持っている。首からは切り取られた人頭をつないで作った環がかけられ，同じく切り取られた手が並べられてスカートとなって腰を覆っている。宝冠に飾られた黒い髪は背を覆い，くるぶしまで流れている。青い肌には腕輪，足輪，真珠のネックレスが光っている。宝冠には元来シヴァ神がつけている三日月の飾りがついており，口からは長く赤い舌を出している。右足は睡っている夫シヴァの胸の上に置かれている。」（立川武蔵『ヒンドゥー神話の神々』せりか書房，2008年，p. 268）。

これは立川氏の表現を引用したものだが，カーリー女神とはこのような女神であるということが一般的である。女神崇拝の台頭とともにカーリー女神は勢力を得てきており，特にシヴァの胸の上に右足を置いているという点では男神よりも女神の勢力が上になったことを強調しているのではないかと考えられる。

「デーヴィーマーハートミヤ」でカーリー女神は大活躍する。この中でのカーリー女神の活躍をみていくだけでも一般的な女神のイメージとは程遠いことが窺える。

どのような人々に崇拝されてきたのであろうか。以下に述べていきたい。

「６世紀頃から頻々（ひんぴん）と登場してくるカーリーは戦場の他に，ヒンドゥー社会と離れたところ，忌避される場所（墓地，山間部，人里離れた場所）などに好んで棲み，インド民衆だけでなく山間部族や不可触民，犯罪者たちといったヒンドゥーカースト社会から閉め出された一種のアウトロー的社会階層にも崇拝されてきた。

シヴァとの関係においてもカーリーは決して従順，貞淑なヒンドゥーの鑑とされる「妻」ではなく，男に従属するおとなしく忠実な女のイメージからはほど遠い。

血に狂い，世界を混乱に陥れ，それを鎮めようとして現れた夫のシヴァに，ダンスで勝負を決めようとするエピソードがある。話はシヴァの勝ち（勝たねば世界が滅びる）で決着がつくが，その“闘い”を表わす有名なターンダヴァダンス像は，決して屈伏しておらず，むしろシヴァ（男）に挑戦し，彼女の絶大な精力，生命力を誇示しているものばかりである。」（山際素男『カーリー女神の戦士』三一書房，1989年，p. 309）。

まとめていくと，カーリー女神とはヒンドゥーの女神のなかでも一際異彩を放っており，血を好む女神であり，社会的地位の低い人々から注目されており，崇拝されてきたのだ。カーリー女神はこれからもインドにおいてスター女神として崇拝されていくに違いない。

ヒンドゥー神話のなかでも特異な存在のカーリー女神の魅力を今回の論文を通して少しでも伝えていけたら幸いである。

浮世絵に棲む妖怪
――絵本百物語を巡って――

文学研究科日本文化専攻　日本文化研究（Ⅱ）専修　加　納　千　尋

本論文は，江戸時代末期に発行された浮世絵草紙『絵本百物語』（天保12年／1841年）に描かれた妖怪の姿形や，該当する妖怪の伝承，物語を追及することで，元は人々の想像である妖怪がどのようにして姿を与えられたのかという疑問を追及するものである。

筆者は，卒業論文にて，妖怪とは人々の思想や不安を具現化し，目に見えるように表現したものであると述べた。つまり妖怪とは，日本人の生活や文化の中から生み出された存在なのである。ならば，妖怪の姿形に注目することで，我々は妖怪の姿をつくりあげた当時の人々の生活文化や意識に近づくことが出来るのではないだろうかと考えられる。

『絵本百物語』は，作者桃山人と絵師竹原春泉の双方から，描かれた妖怪についての見解や伝承が紹介されており，江戸の人々と浮世絵と妖怪の関係を顕著に表すことが出来る資料のひとつである。筆者は，江戸の町文化と密接に関わる浮世絵と，その画題のひとつとして現れた妖怪画を『絵本百物語』を中心に追い，妖怪の姿形に人々が込めたものについて考察する。

第1章では，江戸の妖怪画の土台となる浮世絵の歴史について辿り，江戸の町人文化との関わりについて述べる。浮世絵とは，庶民による庶民のために描かれた庶民の絵だという。では，庶民の画題に何故妖怪が描かれるようになったのだろうか。当章では，人々の「浮世」に対する意識にも焦点をあて，人々が現世に求める理想について述べた。

第2章では，妖怪画の広がりについて述べる。江戸時代の中期頃には，大勢で集まり怪談を話し合う百物語という遊びが流行した。百物語の流行は，それまで地域性を保っていた各地の怪談や伝承に大きな影響を与えた。多くの怪談，妖怪にまつわる話は江戸に集められ，本にまとめられるようになった。これらの本の挿絵として，妖怪は前にも増して絵に姿を描かれるようになったのである。しかし，それは妖怪という曖昧だった存在を縛り付けることにもつながった。

当章では，百物語本とは別に発展した博物学や妖怪図鑑の登場についても触れる。

第3章より，本論文の核である『絵本百物語』について深く論じる。『絵本百物語』には，44体の妖怪が紹介され描かれているが，筆者はそれらの妖怪を博物学のように分類出来るのではないかと考え，妖怪を正体や属性を基に分類を行った。結果，『絵本百物語』に描かれた妖怪たちは，それぞれ狐，狸，蝙蝠，狼，その他動物，鳥，魚介，虫類，植物，自然，人工物，人型に分けられることが判明した。

第4章以降は，第3章で分類した妖怪について，絵解きを行う。中でも第4章では，狐，狸，蝙蝠，狼，鳥，その他動物，魚介，虫類というように，命ある生き物に起源を持つ妖怪について論じる。特に，古くから化ける動物として恐れられてきた狐や狸については，人々が抱くイメージも強く残っており，妖怪という怪しげな姿でなく，野狐や豆狸といったほぼ動物の姿そのままという絵も見られた。また，現代の我々には化け物とはあまり考えられない五位鷺や狼なども，江戸の人々にとっては有名な化ける動物だったようである。

第5章では，人や自然に起源を持つ妖怪について述べる。当章では人の姿をした妖怪や自然現象を妖怪視したものについて論じる。江戸時代の人々にとっては，流行病や連続死なども妖怪の仕業だと考えられていた。これは，先述した「妖怪とは思想や不安を具現化したもの」という考えを裏付ける論証である。

また，人の姿をした妖怪の中には幽霊も含まれており，恨みや妬みといった感情を強く持つことで，人は死んだ後にも影響を及ぼすことが出来るという考えを多くの人々が共有していたことが明確になった。

一方で，飛縁魔や寝肥といった生まれや性癖から差別され，本人の意識に関係なく周りの感情や意識から妖怪と認定されてしまったものも見られる。

第6章では，以上の論述について再度考察を行い，妖怪に姿が与えられた意味についてまとめを論じた。

妖怪という分野は，様々な学問からあらゆる視点で追及することが出来る分野であると筆者は考えている。本論文では，美術史を中心に踏まえつつ，妖怪の存在意義についても考察し，思量することが出来たと思う。